

## 平成28年度 第2回山梨県考古博物館協議会議事録

1 日時 平成28年12月7日(水) 午後2時～

2 場所 考古博物館(風土記の丘研修センター)

3 出席者 (敬称略)

(委員) 飯野奈津子、井出薫子、笹本森雄、石原初江、石川博、田代孝、  
長澤宏昌、堀内秀樹、古屋美代、渡邊富孝、小林千澄、高保裕樹 12名  
(事務局) 萩原館長、駒井副館長、高野次長、吉岡学芸課長、職員3名  
(教育庁) 小澤学術文化財課長、学術文化財課職員1名

4 会議次第

- (1) 開会
- (2) 委員紹介
- (3) 事務局職員等紹介
- (4) 正副会長選出
- (5) 議事
- (6) 閉会

5 会議に付した事案の件名

- (1) 平成28年度考古博物館経過・予定事業について
- (2) 考古博物館の利用促進について
- (3) その他

6 議事の概要

(委員)

教育関係者にお伺いしたい。学校教育の課程で、考古博物館を校外学習の場として活用することは可能か。

(委員)

小中に関し、義務教育は教育課程に則っているものであるが、例えば6年生の歴史学習や、総合的な学習など、考古博物館を活用する方法はいくつかある。

(委員)

高校に関していえば、社会科は選択科目である。故に学校全体として考古博物館を校外学習で活用することは困難。また個別に活用するとしても、往復の生徒の安全確保など問題も多い。

(委員)

国道や駐車場の考古博物館案内表記について、英訳のスペルが誤っているのでは。

県外や他地域から考古博物館に向かうに当たり、どこに博物館があるのかわからない。道路にモニュメントなどが何もない。財政が厳しいのかもしれないが、例えば観光業者と提携し広告枠を設けるなどして可能ではないか。風土記の丘全体でひとくくりにし、例えば「縄文村」などわかりやすいキャッチフレーズを定めたいかがか。

(事務局)

英訳スペルについては複数の表記方法があるものであるが、再度確認する。

(委員)

スペルが複数存在しているのは承知しているが、看板により異なることは好ましくない。統一をお願いしたい。

(事務局)

古墳から縄文から年代も幅広く、なかなか1つの用語でキャッチフレーズを統一することは難しい。参考に、湯之奥金山博物館などは「甲斐黄金村」であり、それは金山に特化した館だからできること。これらを参考に、親しみやすい名称を考えて参る。

(委員)

様々なイベントを行っており、職員の苦労は大変なものと思う。敬意を示したい。特別展は県外史料を運んできて常設展を移動して開催している状況。特別展示室の設置など、建物全体をリニューアルする時期にきているのでは。

(事務局)

施設面では30数年経過し老朽化していることに加え、ご指摘のとおり特別展の際には常設展を移動するという全国的にも考えられない状況。知事にも要望しているが、なかなか実現が困難。イベントについては多すぎることは認識している。ただし県民からの声もありなかなか減らせない。それだけ多く利用いただいているということ。また当館の特性として東京や神奈川の生徒の利用が多く、甲府市内が少ない状況。身近な生徒に来てもらうよう努力して参りたい。

(委員)

8月に金生遺跡を訪れた。その北、長野県に井戸尻、尖石、和田峠の黒曜石、さらにその先に姫川の翡翠があるなど、遺跡にも物語がある。県外の博物館との連携も視野に入れれば、古代の人々への創造力も高まるのでは。もう一つ、素朴な感動が重要。三内丸山遺跡を過去2回ほど行き、今年改めてもう一度観たのだが、最初の感動がなくなった。入口の建物が立派になり展示がすばらしくなった一方で、実際の発掘現場の見せ方などで感動が薄れてしまったもの。

(事務局)

県内の館とは連携を行っており、今年初めて甲府駅北口で縄文フェスを開催するなど好評を博したものである。県外博物館との連携については、まだ検討段階ではあるものの、長野・新潟と3県合同で九州の国立博物館で縄文土器の展示を検討している。当然、縄文以外についても連携が必要と実感している。

見せ方の問題は博物館の命題。遺跡は発掘された瞬間が一番感動し、その後整備するほど感動が薄れていくもの。遺物を館内の箱の中に入れてしまうと感動が薄れるのは当然であり悩ましいところであるが、常に工夫と研究を行ってまいりたい。

(委員)

出張展示について、他の場所にも検討していただけないか。子どもを呼び込むには保護者の興味を惹くことが必要。学校でPTAの学習会が行われるが、その場で土器などを展示していただいただけだと効果的では。また、チャレンジ博物館の参加者が少ないと感じるが、子どもの土日は

非常に忙しいもの。スポ小の試合、練習が入り、スポ小に入っていない子は、そもそも保護者が忙しくスポ小に連れて行けない状況であるが故であり、土日に館に足を運ぶことが困難。夏休みにイベントを多く開催してもらとうとありがたい。

(事務局)

夏休みはスタンプラリーイベントで、毎日体験ができるよう配慮している。希望があればそのメニューについても検討してまいりたい。また、出張については原則埋蔵文化財センターが担当している。

(委員)

山梨の貴重な遺産を維持していくには教育が肝要。教える側の教員が、考古学に詳しい人と苦手な人とに二分されている。教員向け研修会もやっているようだが、副読本などはあるのか。ぜひ山梨のレガシー、アイデンティティを継承してほしい。

(事務局)

ふるさと学習の推進ということで、山梨県全体の歴史を通じたものは義務教育課で作成しているが、考古に特化したものではない。過去埋蔵文化財センターにて手作りで作成した資料はあるのだが、いずれにせよ公のものはない。

(委員)

教科書あるいは副読本は必ず生徒の目に触れるものであるため、効果は大きいはず。

(事務局)

山梨らしさといえばやはり縄文。昨年度の特別展、今年は縄文フェスなど開催したが、まだまだ足りない。縄文土器を貸し出すことは一部で行っている。普段来られない方にも観ていただきたい。

(委員)

デジタル教材があればおもしろい。全国に広がるのでは。また、現在は参加型の展示が増えている。SNSで拡散ができたり、触ったりできる展示が必要。先ほど議論になったが、外国語表記については英語表記のスペルの問題よりも、中国語や韓国語など他言語が全くないことの方が問題では。

(事務局)

教材のデジタル化については検討して参りたい。また参加型の展示の必要性は当然のものであり、手に触れるのは非常に重要。展示方法について工夫する必要があると認識している。また中国韓国からの観光客についても委員のご指摘はもっともであり、多言語化については山梨県でも予算を確保し対応してきたところである。今後更に来館者も増えてくると思われ、対応する必要性を認識している。

(委員)

考古博物館の課題は2つ。1つは広報力、2つめはアクセスである。縄文フェスについてはアピール力アクセスともに評価できる。このような取り組みを続けてほしい。山梨の20代は東京に出て行ってしまふ。NHKでも4月から「山梨いにしえ えらいもん」というコーナーをつくり、山梨のいいものを紹介している。子どもたちにもわかりやすく解説しているがここで

縄文をぜひ取り上げるよう担当者には伝えているところ。

(事務局)

考古博物館の利用者は不思議と毎年同じような人数で定着してしまっているのだが、なんとか広報・アピール力を高め利用を促進していきたい。アクセスの問題は協議会でも毎回指摘されているが、対応がなかなか厳しい状況。山梨に住んでいると、身近な良さというものがわからないもの。

(委員)

高校生達は考古博物館のことをほぼ全員が知っており、小学校の遠足、校外学習で訪れ、覚えている。これはとても大事なことであり、ぜひ続けていただきたい。広報について、美術館・文学館は地域の回覧板に特別展の情報が回ってくる。特に文学館は招待券の配布までである。地元地域だけでもそのような取り組みを行ったらいかがか。

(事務局)

回覧板について、そのような方法については考えたことがなかった。検討していきたい。

(委員)

高校生の子どもがいるが、小学校の遠足で勾玉を作り、嬉しそうに持って帰ってきたことをよく覚えている。今の若者は県外という意見がでたが、以外にも山梨が好きという子も多い。小学校中学校の環境が重要。山梨の魅力をしってもらうよう努力を。

(事務局)

今後工夫を凝らして参りたい。学校へ営業をかけてはいるが、来ていただけるかは先生方の興味による。兵庫で学校関係者へアンケート調査を行ったところ、先生方のクチコミによりその施設の情報が広まるという意見が多かった。

(委員)

校外学習はどの学校も必ず考えている。例えば県立博物館で新しい企画を営業すればそちらに行くし、また違うところに新しいものがあればそちらへ流れる。結局営業をかけても奪い合うだけであるし、民間はおみやげをつけるなどもっと過激な営業を行っている。営業そのものは効果がないと考える。

(委員)

甲府の先生の話の聞くと、バスを借り上げて校外学習に行く場合、保護者から「なぜあそこに行くのか」というアクションがあるとのこと。あまりに身近なところに行ってしまうと風当たりも強い。子どもたちについて土日は忙しい、平日も無理となると、そもそも増やせないのでは。今のままでも十分すばらしいと思う。

- 以上 -